

「さんか・さろん」ニュース

2018年2月20日開催「2018年を展望する」

講師：増田寛也

(野村総合研究所顧問・スローライフ学会会長)

間近に奈良県五条市、十津川村、野迫川村を視察されたということで、まずは当NPOが5年間むらづくりのお手伝いに通っている十津川村のお話から・・・。

■十津川村「高森のいえ」に学ぶコミュニティ

調査によると、介護依存度の最も高いのは高齢の男性独居老人、最も少ないのは女性高齢独居老人。違いは外に出るかだ。男は1人になると家に閉じこもる。老化が進むのは人との接触不足、運動不足が原因だ。

十津川村では今でも鍵をかけないなどの話を聞いたが、日本の住宅は、かつては風通しを考え、鍵などかけない構造だった。それが都市化により、遮音、断熱、治安などのためにサッシで気密性が高くなった。また、近所に誰が住んでいるかもわからない。家の構造的にコミュニティを形成するのが難しくなっている。

村は2011年に大水害があり、それをきっかけに高齢者が安心して暮らせる村営住宅「高森のいえ」を造った。村の材木を使い、風通しが良く、隣とは離れていても共通の広場的なところがあり、催しなどができる。高齢者が気軽に出かけて人と交流できるようになっている。これからの地域拠点のモデルだろう。ああいうミクロのところで新しい動きができています。今後、日本でもCLTの高層ができるようになるから、変わっていくだろう。

■多様なシェアリングエコノミーが動き始めた。

「所有」から「利用」、「モノ消費」から「コト消費」へ。

野迫川村、高野山にも回ったがいわゆるインバウンド、何十人も外国人を見た。ヨーロッパ人が多いとのこと、彼らは滞在日数が長い。高野山には宿泊できる場所があるが、ほかの村では宿が困る。交通の問題もある。

しかし、今後は多様なものがシェアする時代になる。空き室利用の民泊、移動手段、駐車場・会議室・農地などのスペースのシェア、フリーマーケットなどの物のシェアなどなど。

例えば「Uber」の事例。日本では禁じられている白タ



クのことだが。車で移動したい人がいる、車を持っている運転できる人がいる、車がある。6~7年前は個人同士が繋がれなかったが、スマホでこれらが繋がることが可能となった。2008年に「Uber」ができて発展した。

日本の自動車の稼働率は1.9~2.6%、1日あたりの稼働時間28~37分。地方は下駄がわりに使っていて何台もあるが、それを全部含めてもこのくらいの稼働率。必要な資産はすでに豊富に存在していることになる。さらに若い層では、車を購入しなくてもレンタルやシェアでいいという人が増えている。学生は以前ほどがつつ免許を取らなくなった。

兵庫県養父市では特区の指定を受け、タクシー会社も加わった組織で、カーシェアリングを始めようとしている。インバウンド対策はもちろん、高齢者の移動も視野にある。東京ではタクシーがたくさんあるので使えるが、車のシェアは地方では進むだろう。

先日学会があったが、若い研究者の約7割はエアビー（Airbnb）を使って民泊している。その方が安いし、地域の人の同じ住宅に泊り、面白いからと話す。スマホ通りに行って泊まる。それで節約したお金で土地のものを食べたり、昔とだいぶ違う。エアビーは、地方でインバウンドのために認めていった方がいい。民泊法が施行されれば進むだろう。日本の地方はこんなにかいのか、ということが外国人にも分かってもらえる。

■AIにできることは任せ、人間しかできないことをやる。

日本の労働人口の約49%が、人工知能やロボットなどで代替可能だという研究結果がある。代替可能性が低い

生き延びそうな職業を見ると、人の感性に働きかけるものが残る。

アナウンサーなどは語り口や間とかが大事で、残る職業になっているが、エフエム和歌山では人工知能アナウンサー「ナナコ」が天気予報やニュースを読み上げている。地方の小さな局がアナウンサーを抱えるのは大変だが、AIなら深夜でも24時間でもできる。災害で停電があった時、皆がラジオを聞き、とても役立ったそうだ。ということで、地方が元気になっていく例もある。

道の駅をよく利用するが、人口が減ると物の商圏も減って困るが、宅配便があるので、地方のお母さんたちの加工品などが売れていく。新しい仕組みを利用していないとダメだ。昔のままでは無理なのだから。

高度成長期から続いてきた、物を持つことがステータスだった価値感から、持たなくてもいい、というようにようやく変わってきている。今の若い人の合理的なやり方を取り入れていこう。貪欲に新しいことを入れて、古いものを残していくこと。融合を図らないといけない。



めるというニットで、被災したお母さんたちが編んでいる。15万円くらいする。ここの若い30代の女性社長の発想が素晴らしい。高齢者ができるようにその仕組みを作っている。従来の感覚ではあきらめていたことを、自分を介して繋いで成功させている。こういう若い人に期待する。

人間しかできないことを若い人ができるように、若いうちほどどんどん挫折を経験することだ。人間らしい感情を持てるように。都会で時間に覆われて、早い遅いで評価されていては感じる余裕もないだろう。

地方は人口が減り、活動者が少なくなっている。「高森のいえのようなものを、10年~15年の時間をかけて7つの集落につくっていく」と十津川村村長は語っていた。そのくらいの時間がかかるだろう、世代も変わっていく。若いひとたちが地域のために新しい仕組みを使っていくことを応援していきたい。AIなどの限界はあるが、生活の基本のため便利に使えることは使うことだ。コミュニティがなくなってきたことに対し、そういうことにまなざしを向けていかななくてはだめだ。

.....
ご本人からのお菓子、奈良から参加の方からの柿の葉寿司、美味しい差し入れをいただきながらの「さろん」。

質問や感想も多く、また活発に論じ合う場面もあって、「さんか・さろん」らしい感じに。時間切れとなり続きは懇親会に持ち越されました。

(事務局：野口智子 記)



■ “いつでも・どこでも・だれでも” から “いまだけ・ここだけ・あなただけ” へ。

ただAIには限界がある。挫折や絶望を経験できない、そこから這い上がることもない。人間らしい経験ができない。こういう人間の本質的な力を、次に繋げるところに使っていこう。

まだまだ24時間・365日営業などというのが幅を利かせているが、本当にそれでいいのか？「いつでも・どこでも」という価値軸にあわせると、地方は大きいところに負けてしまう。

例えば「気仙沼ニッティング」。注文をしてから編み始